他者志向的達成動機と対人的感情経験の関連

○伊藤 忠弘 平井 花
(学習院大学文学部) (学習院大学人文科学研究科)
キーワード: 達成動機 感謝 信頼感

The relationship of the other-oriented achievement motivation and interpersonal affective experiences

Tadahiro ITO

Hana HIRAI

(Faculty of Letters, Gakushuin University)

(Graduate School of Humanities, Gakushuin University)

Key Words: achievement motivation, gratitude, feeling of trust

目 的

他者志向的達成動機は、自分のパフォーマンスに対する他者の期待に応えようとして、あるいは自分への応援やサポートに対する「恩返し」として、課題達成に努力する動機づけである。他者志向的達成動機の強さや「自分のため」に努力する自己志向的達成動機との関係づけの仕方には個人差があり、これまで親の養育態度や期待の内容との関連が指摘されてきた(伊藤, 2012)。他者志向的達成動機の獲得には、重要な他者から期待やサポートを受け取った経験が不可欠であり、重要な他者とのそのような関係性が一般化されるならば周囲の一般的な他者からの期待やサポートを知覚しやすくさせ、日常的に感謝や信頼感を感じやすくなることが予想される。そこで本研究では、日常生活における対人的な感情経験と他者志向的動機の関連を検討する。

方 法

研究参加者 大学生 126 名 (男性 68 名; 女性 57 名; 不明 1 名); このうち 2 回目の調査にも参加したのは 105 名 (男性 59 名; 女性 45 名; 不明 1 名)

感情経験についての調査 7 日間にわたって 1 日 3 回参加者にメール送信し、その時点での感情状態について携帯電話(スマートフォン)を介して、REAS を用いて作成された質問票にアクセスさせた。6 つの基本的情動(ここでは報告されない)と、対人的な感情として「感謝を感じている」、「孤独な」、「安心な」、「ありがたい」、「心配した」、「人への信頼感を感じている」の 6 項目に 5 件法で回答させた。また各日の 3 回目の調査時(午後 9 時頃)にその日の「他者に感謝した出来事」と「他者から感謝された出来事」の有無を尋ね、出来事がある場合には内容を回答させた。調査は 2012 年 12 月中旬および 2013 年 1 月初旬の 2 回に分けて実施した。

達成動機についての調査 自己・他者志向的達成動機への態度尺度(伊藤, 2012) 25 項目を他の尺度とともに授業の一部を用いて集団状況で 2013 年 1 月中旬に実施した。

結 果

感情経験の得点化と性差, 相関 6 つの対人的感情について 1 日 3 回×7 日間, 計 21 回の合計を 1 週間の感情経験得点とした。 t 検定で性差を検討したところ、感謝 ($M=64.6$ vs 54.1)、ありがたさ ($M=66.8$ vs 57.4)、信頼感 ($M=66.4$ vs 54.7) で有意差が認められ ($t=3.31, 3.11, 4.12, p<.01$)、いずれも女性が高かった。安心 ($M=60.1$ vs 53.8) も女性が高かったが ($t=2.55, p<.05$)、否定的な感情では差は認められなかった。

各感情経験得点間の相関では、感謝、ありがたさ、信頼感に高い相関 ($r>.86$) が認められた。安心と上記 3 つの感情の間にも高い相関が認められ ($r>.64$)、男女で一貫していた。また孤独と心配に中程度の相関 ($r=.40$) が認められたが、性別ごとの分析では女性で高く ($r=.60$)、男性で低かった ($r=.26$)。

自己・他者志向的達成動機と感情経験の関連 達成動機態度の下位尺度(自己志向的動機の重視, 他者志向的動機の重

視, 他者志向的動機の否定的側面の認知, 他者志向的動機の自己志向的動機への還元, 自己・他者志向的動機の統合)でも先行研究(伊藤, 2012)と同様に、他者重視 ($M=3.55$ vs 3.22 ; $t=2.20, p<.05$)と統合 ($M=4.72$ vs 4.20 ; $t=3.50, p<.01$)で女性が高かった。このため、性別ごとに感情経験との相関係数を検討した(表 1)。女性では、感謝、ありがたさ、信頼感を感じる人ほど自己・他者志向的動機を統合して捉える傾向が認められ、男性でも信頼感について同様の傾向が認められた。一方、孤独や心配といった否定的感情を感じている人ほど、男性では他者志向的動機の否定的側面を認知したり、自己志向的動機に還元して捉える傾向が認められたが、女性ではこの傾向は見られず、むしろ他者志向的動機を重視する傾向が認められた。

表 1 感情経験と達成動機態度の相関

	感謝	孤独	安心	ありがたさ	心配	信頼感
自己重視	0.10	0.00	0.01	0.10	0.09	0.02
	-0.11	0.05	-0.05	-0.08	-0.01	-0.04
他者重視	0.13	0.09	0.15	0.11	0.09	0.16
	0.00	0.38	0.02	0.00	0.35	-0.09
他者否定	0.00	0.32	-0.03	0.01	0.36	0.05
	0.14	0.14	0.22	0.20	0.03	0.12
還元	-0.08	0.19	-0.11	-0.09	0.30	-0.04
	0.05	0.11	0.02	0.07	-0.04	-0.04
統合	0.12	0.00	0.15	0.13	0.17	0.21
	0.25	0.06	0.15	0.31	-0.04	0.23

上段: 男性; 下段: 女性

感謝した出来事と感謝された出来事 7 日間の出来事の数単純合計して指標とした。まず女性が感謝出来事 ($M=3.1$ vs 1.6)、被感謝出来事 ($M=1.37$ vs 0.76) 共に多く挙げていた ($t=4.58, 2.98, p<.01$)。感謝出来事と感謝、ありがたさ、信頼感に正の相関 ($r=.34 \sim .37$) が認められたが、被感謝経験では相関は小さかった ($r=.17 \sim .19$)。2 つの出来事には正の相関 ($r=.39$) が認められた。感謝出来事 (0 個, 1~2 個, 3 個以上) と被感謝出来事 (0 個, 1 個, 2 個以上) の数で群分けし、達成動機態度の得点についてそれぞれ群 (3) × 性別 (2) の分散分析を実施した。感謝出来事の有意な効果は得られなかったが、被感謝出来事では、自己重視 ($F=2.94, p=.058$)、他者重視 ($F=4.86, p<.01$)、統合 ($F=2.97, p=.056$) で主効果が認められ、2 個以上挙げている群が他の 2 群と比べて、自己重視が低く、他者重視、統合が高かった。

考 察

他者志向的達成動機を保持している人が周囲の他者との関係において日常的に感謝や信頼感を感じやすいとした予測と一致する結果が得られた。ただし他者志向的達成動機づけの関係づけと共に、孤独や心配といった否定的な感情と他者志向的動機づけの関係に性差が認められ、その起源について検討を重ねる必要がある。また感謝出来事の数と他者志向的達成動機の獲得には関係が認められず、指標の妥当性を含めて今回の予測についてさらなる検討が必要である。